

星と羅針盤

上田 富夫

1. 「私たちの誓い」とポドテキスト研究

同志会の活動の中心は「研究」である。黒井さんが「大阪支部が半世紀に渡る試練を乗り越えてきたのは、日本の体育・スポーツの民主的、科学的発展をめざす世界観を持っていたからである」と述べているように、同志会の研究は体育・スポーツ実践の民主的変革をめざしたものであり、そのためには体育・スポーツ実践の目的・内容・方法を統一的に研究しなければならない。

従来の授業研究は、各自の実践を持ち寄って、その実践を集団的に分析するという研究が中心であった。大阪支部が1980年代に始めたポドテキスト研究は、授業の計画作りから集団的に取り組む研究であり、一つの教材の「計画→実践→総括」のすべてを一年間かけて支部全体で論議したのである。

共同研究であるから、実際の授業も「複数の眼」で分析する必要があり、共に授業計画を検討した研究部員が実践者の学校を訪問して観察記録をまとめるという、現在の管理体制下では考えられないようなことも実行していた。

ポドテキスト研究でとりあげた教材は、バスケットボール、マット運動、ハードル走の三つであったから、ポドテキスト研究は三年間にわたって実施されたことになる。以後、この研究スタイルが、大阪支部の研究スタイルとなり、それ以後のブロック研究やプロジェクト研究に受け継がれていく。

支部の研究スタイルが上記のように変革された背景には「私たちの誓い」（体育・健康教育の課題は・・・日本の子どもたちに・・・真に国民教育の名に値する目標・内容・方法の統一の見解を明らかにすることである）という羅針盤が存在していたことを忘れてはならない。

2. 適材適所

9月28日の総会で、榊原さんから「喜連村史の実践研究」の講演があったが、その講演から私が感じたことは、「研究の深化・発展は先を見通す力（＝発想力）と組織（＝人とのつながり）がキーポイントである」ということであった。

数学を勉強していると「数学的発想」（注）にいつも驚かされる。「数学的発想」なんて常人にはとても無理であるから、研究を発展させる「発想力」のある人も、そんなにいるとは思われない。少なくとも、私自身はそんな発想力を持ち合わせていない。私は大阪支部で研究部長、事務局長、支部長を歴任したが、一番居心地の良かったのは事務局長であった。人には適材適所があるのである。

3. 支部活動を支えた人々

「喜連村史の研究」でも明らかになっているが、榊原さんはそんな発想力を持つ人である。彼だからこそ、ポドテキスト研究という研究スタイルを産み出すことができたのだと思う。また、「『喜連村史の研究』の成果は榊原さんの発想力だけでなく、その発想を具体化させる人達がいたからこそである」と言う。つまり研究を深化・発展させるには人材（＝集団の英知と行動）が欠かせないということである。

もう一つ重要なことは、同志会は研究だけを目的としている団体でない、ということである。日本の子どもたちを「スポーツ分野の主体者」に育てるために、同志会の研究・運動を普及・拡大させていくことも、同志会はめざしている。「私たちの誓い」を実現するには、この研究に加わる仲間、研究成果としての実践を行う仲間を増やさなければならない。黒井さんの言う「研究活動と組織活動の統一」である。

この組織拡大に中心的な役割を果たしてきたのが黒井さんである。彼の「組織力」の源泉は何であろう。物おじしない性格、情報収集力（ものすごい数の本から得る）豊富な話題（＝誰とでも話せる）等が考えられるが、それだけではないであろう。このような組織力をもつ人も、そうザラにいるものではない。

もう一人、忘れてならないのが出原さん。研究の深化・発展には「学習」が欠かせない。80年代は学力論、スポーツ研論、経済学などの学習していたが、「今、何を学習するのか」を明確に判断できないのが常人である。それをみんなに疑問なく示せたのが出原さんである。

この三人が、当時の同志会大阪支部を支えたのだと思う。ポドテキスト研究の終了後、大阪支部は研究の主体をブロック、プロジェクトに移した。ブロック研究は頓挫したが、各プロジェクトは大いに頑張った。「役（＝仕事）が人を育てる」と言われるが、各プロジェクトが主体的に研究を行うようになって発想力を備えた会員が多く出現する。水泳Pの中川、黒野、内田、牧野。舞踊Pの橋詰、本郷。球技Pの山本、船富。発達Pの小池、辻内。健康教育の上野山、大津、等々。榊原、黒井を中心に、これらの人々が集団として支部研究の深化・発展、普及に貢献したのである。

4. おわりに

◎大阪支部は早期からブロック制を導入したが、支部の組織拡大の中心的役割を果たしたのは各ブロックの活動である。

◎支部活動の両輪は研究活動と組織活動であるが、この両者を推進する機能を果たすのがニュース、機関紙を発行する編集部である。

◎研究部、事務局、編集部の三局体制とブロック制を確立し、その各部局、ブロックのかつどうの「計画－実践－総括」を丁寧に支部全体で論議してきたことも、大阪支部の発展に大きな要因であると思う。